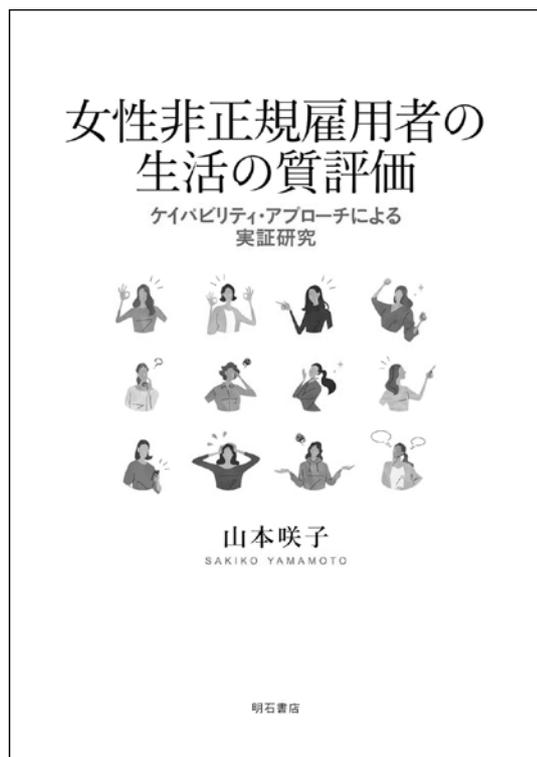


山本 咲子 著

## 『女性非正規雇用者の生活の質評価』

(明石書店)



本書は、ノーベル賞経済学者アマルティア・センが提唱したケイパビリティ・アプローチ（潜在能力の手法）の理論に基づき、非正規雇用のシングル女性における生活の質の評価を試みたものである。正規雇用の女性に比べて不利な立場に置かれている彼女らは、どのような生活困難に直面し、生活の質向上のために何が必要なのかについて、ワークショップ調査と個別インタビュー調査を通じて検討している。ケイパビリティ・アプローチに関する実証研究は少なく、方法論も十分に確立されていない中、本書は1つの先駆的な研究として高く評価できる。

日本女子大学人間社会学部教授

周 燕 飛

では、そもそも、ケイパビリティ・アプローチとは何なのか。貧困率や生活満足度、幸福度など、一般的なウェルビーイング指標に比べて、ケイパビリティ・アプローチのメリットはどこにあるのか。

ケイパビリティ・アプローチとは、「働いて収入を得る」、「十分に寝る」、「家を買う」、「健康診断を受ける」など、本人が生活する上で必要とする機能に注目し、その機能を達成させる能力・可能性をどれほど持っているのかを調べることで、人々のウェルビーイング（本書のいわゆる「生活の質」）を評価する手法である。世帯単位ではなく、個人単位で生活の質を評価できることや、経済的指標のみならず、社会的や文化的な要素を含めた複合的な指標で評価できることが、その主なメリットと考えられる。

筆者は、マーサ・ヌスパウム氏が2000年に考案した生活機能リストを参考にしながら、以下の2ステップを踏んでシングルの非正規女性の生活の質を調べている。

ステップ1では、シングル女性19名（非正規11名、正規8名）が参加するワークショップを複数回に分けて開催し、ブレイン・ストーミングによる集団思考法で多くの対象者が必要とする生活機能を抽出した。

ステップ2では、ワークショップ調査をもと

に作成された半構造化調査票をベースに、シングル女性17名（非正規10名、正規7名）に対する個別インタビューを行っている。具体的には、60項目（大分類11項目）の生活機能について、その必要性や達成状況、利用可能な生活資源、資源利用能力の有無等をたずねた。

得られた主な知見は、以下の通りである。

まず、ワークショップ調査の結果によれば、シングル女性が必要とする生活機能は、雇用形態によって大きな差異が見られる。非正規女性のみを確認される機能（「正規転換のための就職活動」、「他者への配慮を示す」など）がある一方、正規女性のみが必要と認識した機能（「家を買う」、「季節のものを食べる」など）もある。総じて言えば、正規女性に比べて、非正規女性が認識する生活機能の項目数は少なく、特に「感情」、「自然との共生」、「身体的健康」、「環境のコントロール」にかかわる項目に対する認識が不十分と見られる。

次に、インタビュー調査により、非正規女性は、金銭と時間の不足が原因で達成できていない機能が正規女性よりも多いことが分かった。さらに、非正規女性は、金銭と時間的資源を利用する能力も欠けている。その主な原因は、スキルや知識の不足よりも、機能達成に対するモチベーションの低さ、将来への不安感、自尊心の欠如にあると著者は指摘する。

最後に、非正規女性の生活の質改善に向けて、インド農村の「自己発見プログラム」という取り組みからの示唆を論じている。インド女性たちは、プログラムへの参加を通じて、人間が持つべき生活機能とは何かについて考え直す機会が与えられ、自己矮小化を克服しようとした。それによって、女性たちは食べ物の衛生管理や入浴回数の増加といった基本的な機能を達成しただけでなく、「怒りの感情を抱く」、「政府に抗議

する」という高度な機能までも獲得したという。

筆者は、こうした「自己発見プログラム」は、日本の非正規女性にも適用可能と考える。具体的には、女性のエンパワメントを促進するプログラム等への参加を通じて、女性たちが本来保障されるべき生活機能が達成できない現状に疑問を抱き、ひいては「怒りの感情を抱く」、「正規と非正規の賃金格差に抗議する」、「選挙で投票して政治を変える」といった高度なケイパビリティの達成までにつながることを期待している。

本書は、困難層の生活課題と支援の在り方について、新たな視座を提供している。評者はとりわけ、非正規女性が、ディセント・ライフに必要なとされる多くの生活機能を認識できないまま、現状への不満もなければ、変えていくモチベーションも持っていないという結果に、驚きを覚えている。困難層の経済問題に注目することが多い評者であるが、生活経営面の意識向上も大切だと改めて実感した。

専門用語の説明がやや不十分で、調査対象が類型化されておらず、人数も少ない等の課題があるものの、視点が面白く、有益な示唆が多く含まれている。生活経営学や貧困問題の専門家、女性就業やシングル女性の問題に関心を持つ全ての方に手に取ってもらいたい一冊です。